

BCG接種の方向性について

「結核に関する特定感染症予防指針」におけるBCG接種について

- ・ 現行の特定感染症予防指針においては、以下の事項について記載している。
 - ・ 乳児期における高いBCG接種率が小児結核の減少に重要であること
 - ・ BCGの接種率の目標値を95%以上とすること

結核に関する特定感染症予防指針（平成28年）（抜粋）

第二 発生の予防及びまん延の防止

四 BCG

- 1 予防接種は、感染源対策、感染経路対策及び感受性対策からなる感染症予防対策の中で、主として感受性対策を受け持つ重要なものである。**我が国の乳児期における高いBCG接種率は、小児結核の減少に大きく寄与していると考えられる**ため、結核対策においても、BCG接種に関する正しい知識の普及を進め、接種の意義について国民の理解を得るとともに、予防接種法（昭和二十三年法律第六十八号）に基づき、市町村においては、引き続き、適切に実施することが重要である。
- 2 市町村は、定期のBCG接種を行うに当たっては、地域の医師会や近隣の市町村等と十分な連携の下、乳児健康診断との同時実施、個別接種の推進、近隣の市町村の住民への接種の場所の提供その他対象者が接種を円滑に受けられるような環境の確保を地域の実情に即して行い、もって**BCGの接種対象年齢における接種率の目標値を九十五パーセント以上**とする。
- 3 BCGを接種して数日後、被接種者が結核に感染している場合には、一過性の局所反応であるコッホ現象を来することがある。コッホ現象が出現した際には、市町村にその旨を報告するように市町村等が周知するとともに、市町村から保健所に必要な情報提供をすることが望ましい。また、医療機関の受診を勧奨する等当該被接種者が必要な検査等を受けられるようにすることが適当である。被接種者が適切な対応を受けられるよう、コッホ現象が発現した際の適切な対応方法を医療従事者に周知するとともに、住民に対してもコッホ現象に関する正確な情報を提供する必要がある。
- 4 国においては、**予防接種に用いるBCGについて、円滑な供給が確保されるよう努めることが重要である。**

第四 研究開発の推進

二 国における研究開発の推進

- 3 国は、結核の低まん延国化を見据えて、**定期のBCG接種の中止又は選択的接種の導入に関する将来の検討に資するため、諸外国の施策等の状況を収集するなど必要な研究を進めることとする。**

BCG接種率及び小児結核の発生数の推移

- BCGの接種対象年齢（満一歳までの乳児）における接種率は95%以上で推移している。
- 15歳未満の新登録結核患者数は年間約30～60人であり、近年は減少傾向にある。

(接種者数) BCG接種者数及び接種率の推移



出典：厚生労働省予防接種情報「定期の予防接種実施者数」

※接種率は、各年度で接種を受けたすべての者を、各年度に新たに接種対象となった人口の推計値で除したものの。このため、実施人口が対象人口を上回り、接種率が100%を超える場合がある。

(%) (患者数) 小児結核の発生数及び罹患率の推移 (罹患率)



出典：厚生労働省結核登録者情報調査年報集計結果

BCG接種の有効性と海外での実施状況及び検討基準について

- BCGは小児結核の予防に対しての有効性が証明されており、世界の大多数の国では乳幼児期を対象にした一律接種が実施されている。

BCG接種の有効性

- BCG接種は小児結核の予防に対して有効性があり、特に結核性髄膜炎・播種性結核の予防に対して高い有効性があるとされている¹。
- 一方で、乳児期を対象にしたBCG接種は成人期の肺結核に対して有効性は限定的とされている²。

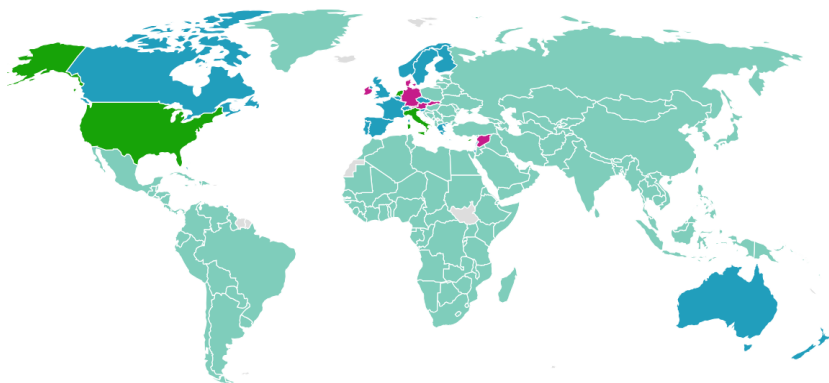
1) Colditz GA et al. Pediatrics. 1995;96(1 Pt 1):29–35.

2) Martinez L, et al. Lancet Glob Health. 2022 Sep;10(9):e1307–e1316.

海外での実施状況及び検討基準について

- 世界の大多数の国では、現在もBCGは乳児期を対象にした一律接種が実施されている。
- 一部の国ではBCGの接種対象者を、両親が各国が定義する高まん延国出身者である児などのハイリスク者に限定している。
- 日本は国際結核肺疾患連合によるBCG接種の中止を検討する基準を満たしている。

各国のBCG接種方針（2020年）



現在、乳幼児期を対象にした一律接種

現在、特定グループに接種

データなし

過去、乳幼児期を対象にした一律接種

過去、乳幼児期を対象にした一律接種で現在特定グループに接種

国際結核肺疾患連合(IUATLD)による BCG接種の中止を検討する基準(1994年)

基準（以下の少なくとも1を満たすこと）	日本の達成状況
1. 塗抹陽性肺結核罹患率が過去3年間にわたり人口10万対5以下	3.0 (2022年) 2.8 (2023年) 2.7 (2024年)
2. 5歳以下小児の髄膜炎罹患率が過去5年間総人口1000万対1以下	1/1000万以下
3. 年間感染危険率（未感染者が新たに感染する割合）が0.1%以下	1980年代に達成

出典：結核の統計、結核登録者情報調査年報集計結果

現状と課題

- BCGは小児結核の予防に対して高い有効性が証明されており、国内での乳児期の高いBCG接種率が小児結核の減少に大きく寄与していると考えられる。
- 指針において、BCGの接種対象年齢における接種率の目標値を95%以上としていたところ、BCG接種率は目標値以上を維持しており、15歳未満の新登録結核患者数は年間約30～60人で推移し、減少傾向にある。
- 一部の国ではBCGの接種対象者をハイリスク者に限定しているものの、世界の大多数の国では、現在も乳幼児期を対象にした一律接種が実施されている。

方向性（案）

- 市町村は、地域の医師会や近隣の市町村等と十分な連携の下、乳児健康診断との同時実施、個別接種の推進、近隣の市町村の住民への接種機会の提供により、対象者が接種を円滑に受けられる環境を地域の実情に即して確保し、BCGの接種対象年齢における接種率の目標値を引き続き95%以上としてはどうか。
- 引き続き、国においては、予防接種に用いるBCGについて、円滑な供給が確保されるよう努めることとしてはどうか。
- 国は、結核低まん延国になり、国際結核肺疾患連合によるBCG接種の中止を検討する基準を満たしていることを踏まえ、定期のBCG接種の中止又は選択的接種の導入に関する将来の検討に資するため、必要な研究を引き続き進めることとしてはどうか。